

「社会問題」としての男性の家事参加

○須長 史生（昭和大学）

研究の背景

本研究は、全国家族調査 18 質的調査で得られたデータにもとに、家族に対する男性(夫)の考え方の変化やその特徴を明らかにし、家事参加に至る／至らない過程を考察するものである。家族社会学では男性の家事参加が常に主要な論点のひとつとして取り上げられており、これまでも性別役割分業規範や経済的合理性などの観点から規定要因を探る試みがなされてきた。本研究もそれらと関心を共有するが、ここではその論点を男性の変化の側面に絞りたい。個人にとっての家族経験が年齢によって異なってくるように、当然家事参加（家族の営み）についての考え方も年齢を重ねるにつれて変化すると考えるからである。そこで、本研究では家事に参加する男性(夫)の、変化の過程を取り上げ、考え方の変化にはどのような特徴があるのか、そしてそこには妻の働きかけが介在しているのかを考察していく。他方で家事に参加しない男性（夫）についても、実際の家庭内の役割分業に対する考え方の特徴を同じ文脈で扱う。

研究目的

本研究は、家事参加（家族の営み）に対する男性の意識の変化の特徴を描き出すこと、そしてそれへの妻からの働きかけの持つ意味を明らかにすることを通して、男性の家事参加を因果関係ではなくプロセスの中で捉えることを目的としている。

研究方法

全国家族調査 18 質的調査で得られたデータのうち、夫データ 12 ケースと妻データ 27 ケースを対象とした。ここでは特に夫データを中心に扱うが、夫の家事参加に言及している部分については妻データも補助的に扱った。ここでは家事に言及しているデータを便宜的に「家事参加をしている」と回答したグループと「していない」と回答したグループに分け、いくつかの話題（家事をする／しない理由、妻からの働きかけ、それに対する自身の考え、現状に対する評価など）について比較し、それぞれの特徴を探った。特にかつて家事に対して消極的もしくは無関心だった者が家事に積極的に向き合うようになったきっかけとなる出来事や、家族に主体的に向き合うことの本人なりの理由づけに注目をした。考察にあたっては末盛 2013 を参考に、夫が自らの家事参加を家族に向き合う上でまじめに考えるべき問題として（いわば「社会問題化」して）考えるに至る過程を整理した。

主な結果

インタビューで「家事に参加しない」と回答した人には、「現状に問題はない」「問題に気がついても些細なことと処理している」といった特徴がみられた。またそのことについて「妻も満足している」と解釈し、現状に問題がないとの認識を示している。他方「家事参加をしている」と回答した人には、家族について妻や家族の考えを尊重することを心がける特徴がみられる。また彼らはしばしば「妻から指示されて家事を手伝うのではなく、妻の生活を見て、自ら必要な分担やサポートを行っている」といった点を留意点として指摘した。また、このような意識を持つに至ったきっかけや出来事を問うと明確に答えるものも複数あり、主に妻からのクレームや単身赴任などの一人暮らし経験が挙げられていた。それらは実感として家事参加の必要性を語る根拠となっていた。

男性(夫)の家事参加の問題は、実際に家事に参加する／しない以前に、家族の現状や営みのあり方について男性(夫)がそれを自らの問題として主体的に向き合うかどうかの姿勢の問題として組み立てられているといえる。そして主体化のあり方に強く影響しているのが、妻からの働きかけや一人暮らしの経験である。

今後、男性の家事参加研究は、因果関係で規定要因を追求することに加えて、男性が家族に対して主体的になっていくプロセスを解明することが重要になってくるのではないだろうか。

【参考】

末盛 慶 2013 「性別役割分担をめぐる夫婦間交渉—クレーム行為に関する実証分析—」 『日本福祉大学社会福祉論集 128』 :35-50

(キーワード：男性の家事，クレーム申し立て，主体的な家庭参加)